九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

重盛像の変遷

板坂，耀子
福岡教育大学助教授

https://doi.org/10.15017/11961

出版情報：語文研究. 64, pp.42-53, 1987-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

重盛像の変遷

板坂耀子

1　いやなやつが来た

「平家物語」における、平重盛像の評価は近来、あまりかんばしくない。石母田正氏は、岩波新書「平家物語」（昭和32年11月発行）中で、

> 院および院の近臣にたいして、仮借しない措置をとろうとした清盛を諫止したときの重盛の言葉は、古来有名であるが、そこには儒仏の思想についての作者の博識ぶりを見ることはできても、中味は意外に貧困なのである。作者がもっとも力を入れて創り上げた人物だけに、物語としてみればかえって破綻も大きい。しかし重盛は、饒舌なだけに、作者の理想や思想を知るうえでは便利である。（第一章「運命について」）

と、作者の思想の代弁者としてのみ評価されている。また、吉川英治氏は、「新・平家物語」で、「古来有名」な重盛諫言の場面をあえてまったく描かれず、その理由として次のように述べられる。

> それはそれで、佳い話だが、ほんとではない。事実の清盛や重盛ではない。その「教訓」のくだりは、以前からも学界に、否定説があるにはあった。しかし、国民教育の見地から「そのままにしておいた方が」という倫理観に支持されて来たのである。だが、今日ではもう教育の資料にもならない。まして、史実でもないものをである。可能なかぎり、真実をさぐり正しく書き、正しい清盛と重盛の対比を見、父は父なりに、子は子なりに、見直すべきではあるまいか。（中略）
>
> 従って、古典平家にあるように、清盛が、重盛の来訪にあわてて、鎧の上に、法衣を着こみ、襟元からそれがチラチラ見えるのをかき合わせながら、子の重盛に、さんざんに、教訓されたなどというのは、根もないことと、いうしかない。
>
> 常識からいっても、一族列座の中で、自分ひとりが古今の学や道徳を能弁にほこり立て、父親の清盛が、あぶら汗を流すまで、ぎゅうぎゅう痛めつけたりなどしたとは、考えられない。そんな高慢くさい親不孝者が、どうして、忠臣孝子の代表みたいに讃えられて来たのか、ふしぎである。
>
> これでは、重盛も、かあいそうだ。清盛には、なお気のどくであ

る。（御座の巻）

更に、石川淳氏「おとしばなし集」の「平清盛」（昭和26年11月発表）における、次のような描写にも、「平家物語」の重盛像への反感がうかがわれよう。

小松内大臣重盛、おつにすました恰好で、そろりそろりと廊下をわたって来る。清盛、それと見るより、顔をしかめて、

「がっかりさせるねえ。いやなやつが来たよ。わが子ながら、きざな男がいたものさ。あいつが来れば、例の諫言のむしかえしだ。もう聞きあきたよ。あの賢人づらを見ただけで、興がさめるね。うまくだまして、追いかえしてやろう。」

こういった印象あるいは評価は、その後もさほど変化はないようである。昭和61年11月発行「日本文芸論稿」（東北大学文芸談話会）第15号においても、佐倉由泰氏は「『平家物語』における平重盛像の考察――物語における機能と文芸的意義をめぐって――」と題して、先述の石母田氏をはじめ、小林智昭氏、山下宏明氏、今成元昭氏らの、重盛像に関する論をひきつつ、重盛を、後白河院や頼朝と同様の、物語における秩序を枠づける存在としてとらえ、そういった面での役割を評価されるが、いわゆる人物像としては、

物語の中で、重盛は、理想的人物としてきわめて賞讃的にとらえられている。しかしながら、重盛をもって、いわゆる英雄とみなすことには違和感を禁じ得ない。彼は、人々の信望と期待を集め、強大な政治力を有しているとされてはいるが、その政治力は、あくまでも潜在的なものにとどまり、新たな政治状況を切り開く形で発現しない。

重盛の人物形象そのものを問題にして、その文芸的達成度を考える場合、積極的な評価はしがたい。これは、重盛の人物像が、儒教的、仏教的理念を体現するがあまり、生動性や情意性を有しておらず、平板で、スタティックな造型となっていることによる。

このように、造型のあり方を見ても、登場人物間の関係でとらえてみても、『平家物語』の重盛の描写に関しては積極的評価をしがたい。

と、否定的である。

2　近世の眼

ところで、近世には、軍記物を換骨脱胎した文学作品が数多い。中でも「平家物語」はよく利用されている。浄瑠璃、読本、黄表紙等には、したがって重盛もしばしば登場している。そこには、特に反感や軽侮の念はうかがわれない。むしろ、きわめて自然に、すぐれた人間、ある種の英雄として描かれている。馬琴「椿説弓張月」中の、重盛の紹介、また大田南畝「源平惣勘定」冒頭の重盛の描写には、吉川英治氏のようなこだわりや、石川淳氏のような揶揄は、まったく見えないのである。[註1]

一つの作品の、近世と近代における、受容のしかたの差、または、平家物語が近世にはどのように評価され読まれていたかの実態、今、それを検討することはしない。

また、この問題の中に、吉川氏がふれておられる、近代の一時期、忠孝の鑑として重盛像がとり上げられつづけたことへの反動が、ど

のようにかかわるかも、後の課題とする。他の部分では、むしろ豊かな空想で作品世界を構築された吉川氏が、この部分でのみ、あえて史実にこだわって、昔から有名な一場面を描かれないのにも、石川氏の嘲笑や、石母田氏の記述にさえも、このような、道徳的教材としてあった重盛像への、複雑な感情を感じる。それを的確にするためには、そのような道徳的教材としての重盛像が作られていった過程も見ておく必要があろう。だが今は、そのいとまがない。

さしあたり、この論文では、少くとも、近世においては、現代の評価とはちがって、重盛像は、かなり自然に、肯定的にとらえられていた可能性があることを前提に、そのような読み方で「平家物語」を読むことができるかどうかをさぐる、一方法として、作品全体の持つ、ある傾向を指摘して、重盛像の以後の変遷を見てゆくための手がかりとしたい。[註2]

3　戦闘のあとに

「平家」には、とらえられた敗者が、勝者の前にひきすえられ、両者の間に問答がかわされる場面がいくつかある。これらの場面には、形式的にも内容面でも、いくつかの共通点がある。

まず勝者が口を開いて、相手のみじめな現状を（時に行動もともなって）確認させ、その原因を追求する。

A入道相国大床にたて、「入道かたぶけうどするやつがなれるすがたよ。しやつこゝへ引よせよ」とて、縁のきはに引よせさせ、物はきながらしやつらをむず〳〵とぞふまれける。「もとよりをのれらがやうなる下臈のはてを、君のめしつかはせ給ひて、なさるまじき官職をなしたび、父子共に過分のふるまひするとみしにあはせて、あやまたぬ天台座主流罪に申おこなひ、天下の大事引出いて、剰此一門亡ぼすべき謀反にくみしてげるやつ也。有のまゝに申せ」とこその給ひけれ。

B前右大将宗盛卿大床にたて、信連を大庭にひすゑさせ、「まことにわ男は、『宣旨とはなむぞ』とて斬たりけるか。おほくの庁の下部を刃傷殺害したん也。せむずるところ、糺問してよくよく事の子細をたづねとひ、其後河原にひきいだいて、かうべをはね候へ」とぞ給ひける。

C兵衛佐いそぎ見参して、申されけるは、「抑君の御いきどをりをやすめたてまつり、父の恥をきよめんとおもひたちしうへは、平家をほろぼさん案のうちに候へども、まさしく見参にいるべしとは存ぜず候き。このぢやうでは、八嶋の大臣殿の見参にも入ぬと覚候。抑南都をほろぼさせ給ひける事は、故太政入道殿の仰にて候しか、又時にとての御ばからひにて候けるか。もての外の罪業にてこそ候なれ」と申されければ、（下略）

Aは、鹿谷の変を計画していた一味の一人、西光法師を捕えた清盛、Bは、高倉宮を頼政のもとへ逃がした後、御所を守って戦い、捕えられた信連に対する宗盛、Cは、一谷で生捕になり、鎌倉へひかれた重衡に対する頼朝の発言である。いずれの場合も、両者の間での武器における戦いは、既に終わるか、もはやなされる余地はない。

にもかかわらず、戦いは終わっていない。無力化した敗者に、その罪を確認させ、因果関係を充分に納得させ、勝者の正しさを心の底から認めさせた上で、当然の罰として、反省しつつ処刑をうけさ

せるのでなければ、勝者の勝利は完成しない。

清盛は、西光がいやしい身分でありながら成り上がり、明雲僧正の流罪など、思い上がった行為の数々をして天下を騒がせた「過分のふるまい」の一環として謀反の計画を位置づけ、「入道かたぶけうどするやつがなれる」当然の結果と、西光の現状を判断させようと、相手の顔をふみつける具体的事実も与えて、努力している。

宗盛は、「宣旨の使」と名のって捕えに行った役人に対し、「宣旨とはなむぞ」と言って応戦した信連の、その発言と行動を問題にし、責めている。とりわけ、この発言は、戦いの際の勢いで出たものであるにせよ、人々が共有する秩序を破壊するもので、信連にとっては不利な、形式的なものではあっても充分に罪を自覚させるべきものである。宗盛は、そこを意識し、ついてくる。

頼朝の発言は、前二者よりも表現はやわらかいが、内容は軽くない。彼は、父義朝の仇をとるという私憤と、君命に従って行動したという公の立場を結合させつつ、「意外に早くお目にかかれた」と相手を冷やかに揶揄し、勝利に酔う。その誇りをもって、南都炎上が重衡の自由意志によるものか、清盛の命令であったか問いただす。これは、重衡自身が、この少し前に、法然に対し、充分に自分の罪と意識して語り、作者も平家滅亡の原因となった罪業と、位置づけているものである。頼朝は重衡に、あらためて一族と彼個人としての、その罪を自覚させ、現在の運命を納得、確認させようとするのである。

4　不誠実な回答

これに対する敗者たちの反論を見よう。

A西光もとよりすぐれたる大剛の者なりければ、ちとも色も変ぜず、わろびれたるけしきもなし。居なをりあざわらて申けるは、「さもさうず。入道殿こそ過分の事をばの給へ。他人の前はしらず、西光がきかん所にさやうの事をば、えこその給ふまじけれ。院中に召つかはるゝ身なれば、執事の別当成親卿の院宣とて催されし事に、くみせずとは申べき様なし。それはくみしたり。但、耳にとまる事をもの給ふものかな。御辺は故刑部卿忠盛の子でおはせしかども、十四五までは出仕もし給はず。故中御門藤中納言家成卿の辺に立入給しをば、京わらはべは高平太とこそいひしか。保延の比、大将軍承り、海賊の張本卅余人からめ進ぜられし賞に、四品して四位の兵衛佐と申ししをだに、過分とこそ時の人々は申あはれしか。殿上のまじはりをだにきらはれし人の子で、太政大臣まで成あがたるや過分なるらん。侍品の者の受領検非違使になる事、先例傍例なきにあらず。なじかは過分なるべき」と、はゞかる所もなう申ければ、入道あまりにいかて物もの給はず。（巻二「西光被斬」）

B信連すこしもさはがず、あざわらて申けるは、「このほどよな〳〵あの御所を、物がうかゞい候時に、なに事のあるべきと存て、用心も仕候はぬところに、よろうたる物共がうち入て候を、『なに物ぞ』ととひ候へば、『宣旨の御使』となのり候。山賊・海賊・強盗など申やつ原は、或は『公達のいらせ給ふぞ』或は『宣旨の御使』などなのり候と、かねゞ〳〵うけ給て候へば、『宣旨とはなんぞ』とて、きた候。凡者物の具をもおもふ様につかまつり、かねよき太刀をももて候ば、官人共をよも一人も安穏ではかへし候はじ。又

宮の御在所は、いづくにかわたらせ給ふらむ、しりまいらせ候はず。たとひしりまいらせて候とも、さぶらひほんの物の、申さじとおもひきてん事、糺問におよんで申べしや」とて、其後は物も申さず。（巻四「信連」）

C三位中将の給ひけるは、「まづ南都炎上の事、故入道の成敗にもあらず、重衡が愚意の発起にもあらず。衆徒の悪行をしづめんが為にまかりむかて候し程に、不慮に伽藍滅亡に及候し事、力及ばぬ次第也。昔は源平左右にあらそひて、朝家の御まもりたりしかども、近比源氏の運かたぶきたりし事は、事あたらしう初めて申べきにあらず。当家は保元・平治よりこのかた、度々の朝敵をたいらげ、勧賞身にあまり、かたじけなく一天の君の御外戚として、一族の昇進六十余人、廿余年のこのかたは、たのしみさかへ申はかりなし。今又運つきぬれば、重衡とらはれてこれまでくだり候ぬ。それについて、帝王の御かたきをうたるものは、七代まで朝恩失ずと申事は、きはめたるひが事にて候けり。まのあたり故入道は、君の御ためにすでに命をうしなはんとする事度々に及ぶ。されども纔に其身一代のさいはひにて、子孫かやうにまかりなるべしや。されば、運つきて宮こを出し後は、かばねを山野にさらし、名を西海の浪にながすべしとこそ存ぜしか。これまでくだるべしとは、かけてもおもはざりき。たゞ先世の宿業こそ口惜候へ。たゞし『殷湯はかたいにとらはれ、文王はゆうりにとらはる』といふ文あり。上古猶かくのごとし。況や末代においてをや。弓矢をとるならひ、敵の手にかゝて命をうしなふ事、またく恥にて恥ならず。たゞ芳恩には、とくとくかうべをはねらるべし」とて、其後は物もの給はず。（巻十「千手前」）

これらの反論に共通するのは、まず勝者との間の差を縮めようとする意識である。西光や重衡の主張はいずれも、勝者が王法や神仏と自己を一体化させているのに対し、歴史的事実を指摘することによって、両者の立場を相対化させ、相手を自分と同じ立場にひき下げようとするものである。信連の「武器さえよければ勝っている」という発言も、単なる負けおしみでなく、戦闘経過の分析確認によって、原因を明らかにし、相手の勝利をいたずらに大きなものとさせないのである。

これらは、彼らの反論の中では、彼らが真実と信じているものであり、攻撃の部分である。そして、このような、より大きな力の前では両者の間に差はないとする主張が、すなわち相手への攻撃となり得ると考えているところに、「平家物語」の作者の一つの特徴がある。しかし、今はそれにはふれない。問題としたいのは、このような攻撃を行う一方、相手からの攻撃に対し、彼らが守勢にたつ部分の不誠実さである。

西光は、最も問題となるはずの謀反の計画に対し、「院中に召つかはるゝ身なれば」「それはくみしたり」と、自分の意志ではないかのような表現もぬかりなくとりつつ、あっさりと明確に認める。信連の「宣旨のお使」云々の発言も、彼が本当に庁の役人を盗賊と誤解していたのではないことは明らかな、詭弁である。そして、法然に対しては、「不慮に伽藍の滅亡に及候し事、力及ばぬ次第にて候へども、時の大将軍にて候し上は、せめ一人に帰すとかや申候なれば、重衡一人が罪業にこそなり候ぬらめと覚え候。かつうはか様に人しれずかれこれ恥をさらし候も、しかしながらそのむくひとのみこそおもひしられて候へ。」と涙ながらに語った重衡が、頼朝に対して

は、「力及ばぬ次第也」と、質問はいわばいいかげんに切りすてて、ただちに源平の地位の歴史的考察に移り、自らの迷いや苦しみを、この場ではいっさい口に出さない。

いずれの場合もそこには、正直であろうとか、相手の質問に誠実であろうとかいった意識はまったく見えない。単に、相手への反感などという、感情的なものでは片づけられないほど、徹底的に冷静に、彼らはことばを選び、嘘をつく。信連の場合に典型的なように、その嘘を相手が信じるかどうかさえ、まったく問題ではないこともある。彼らが真に言いたいことは、先に述べた、相手と自分との地位の相対化にある。それ以外の、特に敗北の原因となった自分の行動については、あらゆる手段を使って、罪状を否認し、反省を拒否する。

しかし、彼らがしばしば「とく〳〵かうべをはねらるべし」の常套句で論を結ぶことで確認するように、罪状の否認は決して命乞いのためになされるのではない。といってまた、この語自体も「平家物語」の場合には、相手への恭順ではなく、むしろ神仏の決定した運命に従うことをいちはやく宣言して、相手の介在の余地をなくし、無視することに目的がある。それにしても、その語は、彼らの罪の否認が、命惜しさによるものではないことを、表明するであろう。[3]

だが、罪状の否認が命乞いのためでないと同様、反省の拒否はまた決して、処刑への口実を、相手に与えるものであってはならない。西光が、動かせない事実の容認というかたちで、自分の罪状が確認されることに、討論の焦点が向くのを恐れて、事実だけはすばやく容認して、論の中心をそこからずらしてしまい、他の点で言いたいことを言いちらす一方、その事実の確認についても、自分の意志であったか否かについてはしぶとく保留しつづけて、不要な明言、意志表示は冷静にさけているのも、信連が、糺問されるであろう高倉宮の行方について、「知らないが、知っていても言わない」と、黙秘する決意を明確に相手に伝えつつ、知らないと嘘をつく形式を守ってみせることによって妥協する余地を相手に残す、二重の回答拒否をして、本来、二段階を経て相手に伝え得るはずの、聡明さと意志の強さとの双方を一度に相手に伝えるという、放れ業を行ってみせるのも、そのためである。西光も、信連も、そうすることによって、現実に命が助かる可能性が生まれるとは、おそらく考えていない。それでも、そういう、一見卑怯ともみえるしぶとさを示すのは、いたずらに生きることを放棄した姿勢をとってはならず、どのように小さい、生きる可能性でも追求しておくことを、彼らが心がけるからである。

命乞いではない、罪状の否認と、生きようとする姿勢を放棄しない、反省の拒否という、一見矛盾しあった、この反論を、彼らが行うのは、何のためか。それは、死ぬ理由もなく、死ぬ意志もない自分を、偶然手に入れたにすぎない勝利の名のもとに、相手が殺すのだという、相手の罪状の確認である。神仏の意志か歴史の流れの中で、たまたま負わされた互いの役割を明らかにした上で、自分と同様の相手の卑小さを思いしらせ、その相手が自分を殺すことの意味を充分に意識させるのである。

敗者には、そのような戦いが可能であった。だから彼らは、気をゆるめないし、詭弁、虚言、あらゆる手段を用いて戦う。「平家物語」が、特に戦闘場面において、卑劣とさえ見える現実的な行動を、さ

ほど否定的でもなく描くのは既に指摘されいてる。[註4] この敗者たちも、なまじな誠実さは持たない。あくまで勝者に気を許さず、ことばのかけひきで戦いぬいた彼らに、周辺の人々は、「ほめぬ人こそなかりけれ」というかたちで支持を与えたことを、「平家物語」の作者は記す。それは、すなわち、作者の支持でもあろう。というよりも、作者自身が、理想として描き、創りあげていった、敗者の対応ぶりなのであろう。

5　虚々実々

勝者と敗者の対決にみる敗者の反論を通して、「平家物語」が、おそらくかなり肯定的に描こうとしている、弱者の姿勢、とりわけ、強者に決して気を許さず、きわめて冷静で現実的な判断に基いて、卑劣、不誠実とも見える手段をも用いつつ、自己の目的を達成していく傾向を述べた。では、それは、弱者が強者に、何ごとかを歎願する場合には、どのようなかたちをとるのであろうか。相手が明らかに、自分にまさる権力を有し、しかもその判断が必ずしも正しいとは信じられないのに、彼らに何かを訴えなければならぬ時、[註5]「平家物語」の登場人物は、どのようにふるまうであろう。

それ又いかでかさる御事さぶらふべき。諸共にめしをかれんだにも、心うふさぶらふべきに、まして祇王ごぜんを出させ給ひて、わらはを一人めしをかれなば、祇王ごぜんの心のうち、はづかしうさぶらふべし。をのづから後迄わすれぬ御事ならば、めされて又はまいるとも、けふは暇をたまはらむ。（巻一「祇王」）

清盛から、邸に留まることを強要された仏御前のことばである。彼女には、軽薄な抜目のない女性との評もある。この発言にも単なる涙ながらの哀願とは異る機敏な駆引きが察知されるであろう。「お忘れにならないのなら又来ますから、今日は帰らせて下さい」という言い方には、清盛をなだめて、この場を切りぬけようとする意志がある。

このように、相手の力の絶対性は、現実的事実として認めつつ、相手が自分の心を正しく理解し、誠実に対応してくれることは、これまた現実的事実として期待せず、むしろ、相手の判断基準を目ざとく見ぬき、それを利用して難を逃れようとするのが、強者に何かを歎願するとき、「平家物語」の登場人物たちのすべてに共通する傾向である。

どのように歎いていても、どのように打ちのめされて度を失っているようでも、あるいは、それだからこその必死の本能として、この点で彼らは決して冷静さを失わない。

何事にて候やらん、かゝるめにあひ候。さてわたらせ給へば、さり共とこそ、たのみまいらせ候へ。平治にも既に誅せらるべき候しが、御恩をもて頸をつがれまいらせ、正二位の大納言にあがて、年すでに四十にあまり候。御恩こそ生々世々にも報じつくしがたう候へ。今度も同はかひなき命をたすけさせおはしませ。命だにいきて候はば、出家入道して高野粉河に閉籠り、一向後世菩提のつとめをいとなみ候はむ。（巻二「小教訓」）

鹿谷の変の計画が露顕し、幽閉された大納言成親が、訪れた重盛に助命を歎願している。この少し前に、彼は清盛から西光の自白をつきつけられ、一言の反論もできない。絶望のきわみに訪れた重盛を、地獄で地蔵菩薩を見たような喜びの色で迎えつつ、なお成親は、

相手に対し正直にはならない。「何事にて候やらん、かゝるめにあひ候」と、あくまで謀反の件は認めず、一方で「命だにいきて候はば」「一向後世菩提のつとめをいとなみ候はむ」と、最も相手の気に入る条件を提示する。重盛も又、これを不誠実とは責めぬし、謀反の件をあえて確認もしない。成親が謀反に参画したことは、おそらく、当然承知の上で、彼は清盛に、成親の助命を歎願する。（巻二「小教訓」）

その際、彼の特徴であるところの、故事の引用や、道徳的教訓はある。しかし、むしろ、次のことを見逃してはならないだろう。第一に重盛が、成親は無実だという議論を一切避けていることである。第二に、「既に召をかれぬるうへは、いそぎうしなはれずとも、なんのくるしみか候べき」「是はさせる朝敵にもあらず」と、清盛が最も気にしている具体的問題に、的確な解決を与えていることである。重盛の教訓は、決して非現実的なものではない。冷静な判断と、情勢分析に基いており、それ故に、清盛も納得する。成親の無実云々は、両者の間で議論されない。重盛が議論させない。成親の謀反参画を認めないふりをするのも、認めた上で弁護するのも、どちらも自分を不利な立場におくことを、重盛は知っているからである。

巻二「少将乞請」で、娘の聟となっている、成親の子成経の助命を、清盛に歎願する教盛の場合は、一見、虚心で誠実なように見えて、その自分の感情のほとばしりさえも効果的に用いて、目的を達成する、高度な技術があるように思う。

由なきものにしたしう成て、返々くやしう候へ共、かひも候はず。

と、彼はまず初めから聟の成経を批判して、清盛の正しさを全面的に認めた上で、

相具しさせて候ふものが、此ほどなやむ事の候なるが、けさより此歎をうち添へては既命もたえなんず。

と、娘の悲しみを全面に押し出し、

少将をばしばらく教盛にあづけさせおはしませ。教盛かうで候へば、なじかはひが事せさせ候べき。

と、具体的な安全の保障を行って助命を歎願する。

清盛はこれを拒絶する。と、教盛は、すかさずそれを、自分の問題にすりかえる。自分が——平家一門のためにつくしてきた、この自分が、預って保障しようと言っているのに、なお成経を許さないというのは、つまり、この自分も信用されていないのである、と。

そうとられてもしかたないようなことを、清盛は何も言っていない。それでもなおかつ、教盛はそうとって、強引に、ことを自分の問題にする。ここにも決して、誠実なだけの姿勢はない。あえてそうとっておいて、「そのように疑われるなら、出家してしまおう」と、捨身の切札で脅迫するため、わざと行う曲解である。あくまで個人的な述懐のように見えて、充分に効果をねらった、教盛の発言を次にあげよう。

保元平治よりこのかた、度々の合戦にも、御命にかはりまいらせむとこそ存じ候へ。此後もあらき風をばまづふせぎ参らせ候はんずるに、たとひ教盛こそ年老て候とも、わかき子共あまた候へば、一方の御固にはなどかならで候べき。それに成経しばらくあづからうど申すを御ゆるされなきは、教盛を一向二心ある者とおぼしめすにこそ。是ほどうしろめたう思はれまいらせては、世にあても何にかはし候べき。今はたゞ身のいとまをたまはて、出家入道

し、かた山里にこもり居て、一すぢに後世菩提のつとめをいとなみ候はん。由なき浮世のまじはり也。世にあればこそ望もあれ、望のかなはねばこそ恨もあれ。しかじ、うき世をいとひ、まことの道に入りなんには。

結局、これが効を奏して、清盛も「いやいや出家入道までは、あまりにけしからず。」と、成経を教盛に一時預けることに同意する。

6 戦う重盛

したがって、敗者が勝者に詰問され、反論する場合と同様に、弱者が強者に何ごとかを歎願するのも、戦斗と同様の、虚々実々の駆引きを要する。そこには、誠実さとともに、勇気も、機知も必要である。

「平家物語」で、重盛は、おそらく、この種の技術が最も優れた人間として描かれている。

有名な「教訓状」(巻二)から「烽火之沙汰」(同)にわたる、時の最大の権力者清盛への歎願を、重盛がどのように行なっているかを見よう。

法皇幽閉を企てて一族を集めた清盛のもとへ、一人武装もせずに訪れた重盛は、清盛と対座し、沈黙を続ける。耐えられずに口を開くのは清盛で、これは既に重盛の勝利である。更に、自らの立場を述べた清盛の発言に対し、いきなり泣いてみせて相手の意表をつく。

本来、この場での重盛の発言内容など、清盛にも他の皆にも予想はついており、その点では興味もなかったはずである。それが相手の突然の涙によって「いかにやいかに」と、否応なしに重盛の心境を聞きただす姿勢をとらされてしまう。重盛は、あくまでそれに答えるかたちで、思う存分、自分の意見を述べるのである。

その中で、彼が儒仏の思想を駆使して述べる大義名分は「中身は意外と貧困」(石母田正氏)かもしれない。しかし、説得の技術としては必要である。清盛に、たてまえとして守るべきものを与え、重盛その人にではなく正義に屈したというかたちをとる余地を与えられるからである。

平家のおごりを指摘し、法皇の行動にも道理はあると一方で重盛は言い切る。勇気ある発言である。だが、それと同時にこれが、法皇に一方的に裏切られたと感じて傷つけられている清盛の誇りを守り、落着かせる効果を持つのも否めない。法皇の力におびえ、切りすてられる愚かな弱者になりたくないという清盛の危機感を、法皇こそが弱者であり、平家一門は力を有する悪であると攻撃することによって、薄らげ鎮める作用が、この発言にはあるのである。

重盛は、このようにして、自分自身と、法皇とに対する清盛の誇りを保障する。更に、前章でも見た現実論で「其上仰合らるゝ成親卿めしをかれぬる上は、設君いかなるふしぎをおぼしめしたゝせ給とも、なんのおそれか候べき」と、当面の、現実に法皇に滅ぼされはせぬかという清盛の不安にも、的確な解決を与えることを忘れない。

更に彼は、これだけのことを言った自分自身を清盛から守るため、力と涙の二方面からの脅迫を行なう。

時の権力者に対し、ここまで発言した以上、それを認めさせ実現させなければ、次は自分自身が危い。重盛にとって最高の自己防衛

は自分の意見を採用させることである。前章の教盛の場合と異り、重盛には戦力があった。「かなはざらむまでも、院御所法住寺殿を守護しまいらせ候べし。」「其儀にて候はば、重盛が身にかはり、命にかはらんと契たる侍共少々候らん。これらをめしぐして、院御所法住寺殿を守護しまいらせ候はば、さすが以外(もつてのほか)の御大事でこそ候はんずらめ」。

満座の中での宣戦布告である。その理由も大義名分として充分に述べ、自分の意志というよりも義務であることを強調する。ここでおわれば彼は単なる正義漢であろう。しかし重盛は、前述の西光たちと同様に、生きる努力、成功への努力を放棄しない。

父への反逆を宣した直後、清盛がそれに対して述べるはずの怒りや大義名分を、すばやく彼は先取りし、「迷盧八万の頂より猶たかき父の恩、忽にわすれんとす」「進退惟きはまれり」と先手をうって歎き、「たゞ重盛が頸をめされ候へ」「たゞ今侍一人に仰付て、御坪のうちに引出されて、重盛が首のはねられん事は、安いほどの事でこそ候へ」と、自分の命をとることを迫る。この理屈とこの処置は、清盛の反応として充分に、どちらも予想できることであった。重盛は自分からそれを発言することによって、前もって手をうち、清盛の出る幕をなくし、「そんな理屈は承知の上だ」「そんな処置など恐しくはない」と事実上宣言し、相手の対応を封じてしまう。

述懐の終りの部分は「もうどうしていいかわからない。こんな世の中には生きているのもいやになった」という、厭世的な色調を帯びる。一見、思考の放棄に見える。だが、こうすることによって重盛は、結論を出す責任を清盛に与え、また、その体面を保たせるのである。彼の語る大義名分や、流した涙に決して嘘はないものの、それが正確に意識されて効果的に用いられると同様、この、発言の最終部分での無気力や絶望、厭世観も、本心であっても、すべてではない。もし、それだけが彼の本心であったなら、帰宅後直ちに虚報を飛ばして兵を集め、父への示威行動を行なって、力の脅迫を、ことばのみでおわらせず、現実に的確に裏うちしておく、機敏な行動がとれようか。世の動きに対する絶望や空しさそのものも、武器として利用することができる人物として、彼は描かれているのである。

小林智昭氏は「平家物語の理論構成――重盛論をめぐりて――」(「国語と国文学」昭和二十三年十一月号)で、重盛の論がいったん混迷の極に転落し、その後また毅然とするのを、論の破綻とされ、その涙に痛切さがなく、歎きには「意識的技巧」があるとされる。それは、あるいは、先に述べたような重盛の発言の持つ、虚々実々のことばの戦いという性格から来る印象なのではないかと思う。石川淳氏や吉川英治氏が、重盛の発言や行動にわざとらしさや、鼻もちならなさを感じとられたとしたら、それもまた同様の理由であり、それぞれ、正確な印象ともいえると思う。「平家物語」中の多くの人物がそうであるように、重盛もまた、戦う戦士であり、しかも、後半の義経が戦場においてそうであったと同様、すぐれた戦法を駆使しては、成功をおさめつづける戦士であった。「平家物語」の享受者たちは、このような重盛のすべてに、胸のすくような痛快さを感じていたのではないか。[註6]

7　おわりに

重盛に象徴される、こういった、敗者や弱者の、ぬけめのない、鋭い対応は「平家物語」の作者の、どのような性格にもとづくものか、私にはまだ不明である。当初は、戦場での合戦の場合と共通する、武士たちの、生きる論理によるのだと思った。彼らの現実的判断、形式にこだわらぬ戦う姿勢が、このような虚々実々の論理の描写を生むのかと推測していた。だが、今は、必ずしも武士ではない、むしろ、例えば京の貴族たちの、政治的な日常の中から、「平家物語」の武士たちの登場人物に托して、描き出された論理である可能性も否定できないと思う。

「平家物語」の数多い魅力の一つは、このような、決して相手に心を許さないままに、自らの何かを守り、或いはかちえようとする、虚々実々の、ことばのやりとりにある。重盛が作中で果たす役割は、従来指摘されてきたような種々の面があるだろう。だが少くとも「教訓状」前後における彼は、そのような、ことばの戦いを中心とした、政治的能力を持つ、したたかに強い人物として、肯定され評価されているように思う。近世における、人々の彼への好感も、それが土台となっており、そのまま、やがて、道徳的な教材としてとり上げられていくこととも、つながったのではないだろうか。少くとも、この面における重盛の魅力を無視しては、「平家物語」の面白さを充分に味わうことが難しいように思うのである。

註

1・馬琴の「椿説弓張月」後編巻三に、為朝の生存を察知する数少い人物として重盛が登場する。特に重盛である必要はない所に登場するのが、かえって馬琴や当時の人々の重盛観を示すであろう。他に近松門左衛門は「頼朝伊豆日記」「娥哥かるた」「孕静胎内堵」(正徳三)「曽我五人兄弟」(元禄十四)「孕常盤」(宝永七)「平家女護嶋」(享保四)等に重盛をとりあげるが、いずれも悪意は示さない。とりわけ「娥哥かるた」では、聡明で慈悲深い主君として、また「孕常盤」と「平家女護嶋」では、憂国の士としての面が強調されている。江島其磧「鬼一法眼虎の巻」(享保十八)巻七の二、熊沢蕃山「集義和書」巻一、上田秋成「雨月物語」の「白峯」、平賀源内「源氏大草紙」(明和七)等も、否定的ではない。平賀源内「そしり草」では、頼朝を許したこと、早死を願ったことを批判するが、諫言そのものは、評価する。桜田治助(二世)「伊勢平氏摺神風」(文政元)では小娘と恋をする重盛が登場し、これはその典雅さ、優美さを強調した人物像であろう。いささか諧謔の気はあるが、反感は存しない。河竹黙阿弥「牡丹平家譚」(明治九)の重盛も、堂々と力強い。ただ、これらの重盛像の多くが、既に悪賢いまでのしたたかさ、強さを持たず、悲劇性や道徳性のみが強調されていく傾向を有しているのは否めない。「平家物語」の重盛像が有していたダイナミックな多面性が次第に薄らいで、彼の涙や悲憤が、素直な、それだけのものとしてとらえられるので、無力な良心的存在としての面が定着していくこととともなった。これらの経過については、なお検討したい。

2・主要な異本に、問題となるような大きな異同は存しないことを確認の上、本論の引用はすべて、日本古典文学大系本を使用する。

3・重衡と同様に頼朝の前にひき出されながら、頼朝の発言を威儀を正して聞こうとした宗盛に対し、見ていた人々は「ゐなをり畏給ひたらば、御命のたすかり給べきか。西国でいかにもなり給べき人の、いきながらとらはれて、是まで下り給ふこそことはりなれ。」と情なさに涙を流して批判したと、「平家物語」は記す。命を惜しむことからだけの生きる努力は、決して評価されていない。

4・巻九「盛俊最期」における猪俣小平六の行動など。

5・たとえば巻七「維盛都落」で、維盛の袖にすがって「都には父もなし、母もなし。捨られまいらせて後、又誰にかはみゆべきに、いかならん人にも

見えよなど承はるこそうらめしけれ。前世の契ありければ、人こそ憐み給ふ共、又人ごとにしもや情をかくべき。いづくまでもともなひ奉り、同じ野原の露ともきえ、ひとつ底のみくづともならんとこそ契しに、されば さ夜のね覚のむつごとは、皆偽になりにけり。せめては身ひとつならばいかゞせん、すてられ奉る身のうさをおもひしてもとゞまりなん、おさなき者共をば、誰にみゆづり、いかにせよとかおぼしめす。うらめしうもとゞめ給ふ物哉」と、同行を願う北の方の歎願は、ひたすら虚心な心情の吐露であり、作為も自制もない。相手が、自分の運命を決する力を有してはいても、愛する夫である以上、その判断に信頼をおくからである。しかし、「平家物語」中の歎願の多くは、このような信頼関係の上には成り立っていない。

6・もとより、そこには、相手役の清盛の人物像がはたす役割も大きい。絶対的権力を持ち、それを濫用する反面、ある程度歎願の技術に乗ぜられやすいという、「平家物語」の清盛は、重盛やその他の歎願者の相手役として理想的だった。清盛の死後、このような人物は登場しない。義仲、義経はそのような歎願をされていない。頼朝については「清水冠者」（巻七）で義仲が、「腰越」（巻十一）で義経が、誤解をとくよう歎願するが、清盛相手の場合ほどの生彩はない。なお、「腰越」の義経が、自分なりの不満はありながら、腰越状の歎願の中でそれを語っていないのも、「六代」（巻十二）で、文覚に六代御前の助命を依頼する女房が、六代の素性をあくまで偽っているのも、やはり、相手にすべてを理解してもらえるとは信じていない、弱者の姿勢なのであろう。

（一九八七年八月二五日）